

東南アジアの歴史(前近代史)を生徒はどのように学ぶべきか

同志社中学校・高等学校 川島啓一

■生徒がにがてな東南アジア史!?

東南アジア史は、おそらく生徒がにがてとする分野の一つであろう。王朝やその都、民族、宗教、遺跡などを羅列的に覚えようとするとう地理的状况の複雑さといまわって、すぐに嫌気がさしてくるにちがいない。まさしく東南アジア史は、教員の問題意識が生徒の学びを大きく左右する分野である。では、生徒はどのように学ぶのがよいのか。

時代や土地は違うとはいえ、人はそこに生まれ、育つ。やがて子を産み、育て、老い、死ぬ。当時の人々は何に喜び、怒り、哀しみ、何に人生の楽しさを見いだしたのか。生徒がこのような観点を学ぶことが私は大切だと思う。

■Q & A形式のプリントによる班学習

2年前から世界史の授業をQuestion(教員の作成する問い)、Answer(生徒が記述する答え)形式のプリントを使用し、3～5人の班を形成して行っている。50分授業×2コマ=1セットとして、1コマ目は、前半の約20分で動機づけ、後半の約30分では7～8つのQuestionを班学習で解く(残りは宿題)。2コマ目は、前半の約20分で生徒が黒板に解答Answerを書く。後半の約30分で教員が添削・解説を行う。

アクティブ・ラーニングの講習会に参加し、協同学習の要素を取り入れながら現在、試行錯誤をしているが、学習意識を調査した結果、講義一辺倒だった授業より生徒は自ら進んで学んでいること、より深く歴史を理解していることが明らかになっている。



2コマ目。黒板にAnswerを書く生徒。

以下に、Questionとそれに対する生徒のAnswerや教員とのやりとりを記す。小見出しのようなテーマに沿って東南アジアの前近代史を学習する授業案を提示したい。

■まず東南アジアの地図を上下さかさまに

Q(教員の発問、以下同): 上下さかさまに見ると、どんなことに気づきますか。

生徒A: やっぱり島だらけです。(笑)

生徒B: ボルネオ島が包み込まれるようにインドシナ半島、華南、フィリピン諸島、モルッカ諸島、ジャワ島、スマトラ島、マレー半島があります。

東南アジア史は、まずは地理的認識から。これが深まると、生徒はその歴史をよりいっそう理解することができるようになる。また決定的な海上交通のルートであるマラッカ海峡の重要性を確認する。東南アジアの海域は、「海のシルクロード」の一部として東アジア海域、インド洋世界とつながっている。フェルナン・ブローデルの『地中海』には、あえて地中海とその周辺世界(アフリカ大陸を含む)をさかさまにした図を掲載しているが、いつも見ているものをくつがえすとよりいっそう新鮮になる。

■東南アジアに広く出土する銅鼓(ドンソン文化)

Q: 帝国書院『最新世界史図説 タペストリー 十二訂版』(以下、タペストリー) p.84の④銅鼓の出土範囲は、どこからどこまで広がっているだろうか。

生徒A: 雲南、インドシナ半島、マレー半島、スマトラ島、ジャワ島です。

Q: なぜこのような巨大な青銅製の太鼓が広範囲に広まったのだろうか。

生徒B: もっていると自慢できそう。

生徒C: 当時、こんなに重く巨大なものを船で運ぶには相当の財力や権力があるよね。

生徒D: どうしてもほしい人がいたのでしょうか。祭りや儀式のときに持ち出してくるとか。

生徒E: でも、一家に一台は無理。せいぜい長老の家の一つ、二つじゃないかな。(笑)

東南アジアはモノが行きかった海域である。銅鼓は支配者の権威のシンボルとして用いられたことが『新詳世界史B』(p.43)に記載されているが、やはりこのような威信財を取り巻く人々の「思い」をじっくりと考えさせたい。

■港市国家とは何か？

2012年にソウルで開かれた第2回アジア世界史学会では「Global Exchange Networks of Asia」がテーマの一つとされ、アジアの交易ネットワークをより広いグローバルな観点からとらえなおすこと、また、「陸」の視点からだけでなく「海」の視点をとらえなおすことなどが提唱された。また、2009年の第1回大会(大阪)では、「交易の時代 (the Age of Commerce)」を描いたアンソニー・リード氏が基調講演を行った。

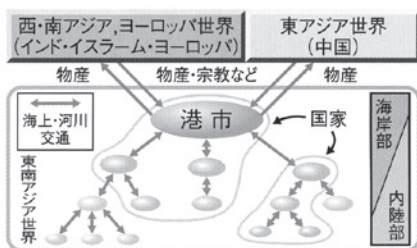
Q: タベストリーp.84~85地図[A]~[D]では、シュリーヴィジャヤやマジャパヒト朝などの最大勢力範囲を表す色線が陸地だけでなく海上にも描かれています。この作図者が、あえてこのように表現したのはなぜでしょうか。

生徒A: 通常の地図とは違いますね。

生徒B: きっと海の支配を重視したからでしょう。

生徒C: 覇権の確立には海域を押さえないと。

Q: タベストリー p.84 キーワード「港市国家」の模式図を見て、この特徴をあげなさい。



『最新世界史図説 タベストリー 十二訂版』p.84

生徒C: 海の外の世界と内陸部の世界の接点に港市があります。まさに海と陸をつなぐ位置ですね。

生徒D: 海や川の移動を通じて多くのモノや人が行きかったんだと思います。

Q: ならば、なぜ当時の人は移動したのでしょうか。

生徒A: 海に出るのはやっぱり危険でしょう。

生徒B: だから、貿易などでがっほりもうかったのですよ。(笑)

生徒C: 生活のためには海に出て行かざるをえない、そんな場合もあったのではないのでしょうか。

■史料(資料)から問い、「声」を聞く

Q: 義浄の史料(『南海寄帰内法伝』、『根本説一切有部こんほんせついつさいうぶ』)

百一羯磨ひゃくいちくわま)を読むと、彼はシュリーヴィジャヤに滞在して何を見たのですか。

生徒A: 1000人以上の仏僧が学問と善行に専念しているところですよ。

生徒B: 1000人以上とはすごいですね。当時の一大拠点だったのでしょうか。

生徒C: 中国の仏僧がより学びたいのならば、ここで学んだのちにインドへ行くのがよいとも言っています。

Q: スコータイ朝の碑文(1357年、1361/62年)には、どんなようすが描かれていますか。

生徒D: 果実や魚や米がとれて象がいます。

生徒E: 現在のタイ王国と同じですね。

生徒F: 仏教が信仰され、どうやら王は仏陀になることを願っているようです。

Q: イブン・バトゥータの史料(『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈物(大旅行記)〈1356年〉』)を読むと、当時のスマトラ島の町には、どんな宗教が広まっているようすが記されていますか。

生徒A: イスラム教です。イスラム法学者を寵愛するスルタンが支配していますね。

生徒B: 異教徒はジズヤをさし出しています。

生徒C: ちなみに現在、世界最大のイスラム教徒の人口をよゆうする国は、サウジアラビアではなくインドネシアですよ。

Q: 陳朝ベトナムと元寇の史料(『大越史記全書』本紀卷六〈1479年〉)を読むと、ここには何が描かれていますか。

生徒D: 陳朝が元軍をうち破った激しい戦いです。

生徒E: 川が真っ赤に染まるくらいに。

生徒F: 元軍は船でも攻め込んでいます。そういえば、博多湾にも船で攻めてきましたね。

生徒G: 騎馬遊牧民のはずのモンゴルが船で攻め込むというのは、とてもおもしろいです。

Q: アユタヤの町の地図(1687年)を見て、気づくことはなんですか。

生徒A: 町がチャオプラヤ川に囲まれています。

生徒B: マレー人、中国人、ポルトガル人、オランダ人、日本人の居住区があります。

生徒C: どんな言葉で会話していたのでしょうかね。

■日本とのつながり(日本町, 朱印船貿易)

Q: タベストリーp.85地図[E]を見ると、どこに日本町はありますか。

生徒A：タイのアユタヤ，カンボジアのプロンペン，フィリピンのマニラ，ベトナムです。

Q：どのような生活を送っていたのでしょうか。

生徒B：日本とのつながりを生かすと，貿易や商業を行うことができたと思います。

生徒C：タペストリーp.85②にはアユタヤの日本人義勇軍とありますが，山田長政は用心棒ですね。(笑)

教員：彼についてはぜひ，遠藤周作『王国への道』を読んでほしいと思います。おもしろいですよ。

Q：日本町は徳川幕府の鎖国政策（海禁政策）で衰退しましたが，遠く日本を離れた地で生きていた当時の人々はこれをどのように思ったのでしょうか。

生徒D：とてもびっくりしたと思います。

生徒E：日本町からひとりひとりいなくなってゆくように思いをはせると，とても切ないですね。

Q：1632年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫はどんな内容の墨書（落書き）を回廊の柱に書いたのですか。

生徒A：「父の菩提を弔うため」とあります。

生徒B：仏像四体を奉納したようですね。

生徒C：なるほどアンコール・ワットは「祇園精舎」に見えないこともない。(笑)

Q：彼はどうやってアンコール・ワットまでどりついたのでしょか。

生徒D：朱印船が行きかった時代ですね。

生徒E：どこかの貿易船に乗ったのではないでしょうか。当時は長崎から出航できます。

生徒F：それにしても，果てしない船旅ですね。嵐がきたら危険きわまりない。

生徒G：朱印船時代の船乗りの航海技術はとてもすぐれていたのでしょうか。

生徒H：やっぱり私は飛行機がいいです。(笑)

■世界史教育はどこへ向かうのか

この授業形式に対する生徒のコメントには，「史料（資料）を読むのがめんどろ」，「難しい」などが見られるが，肯定的なコメントも多い。例えば，「プリントの空欄をただ暗記するだけではないのでよかった。」，「史料（資料）を読むのが楽しい。難しいものもあるけど，当時のことがよくわかる。」，「班での学習は，自分では思いつかない意見を聞けるので貴重。」，「歴史の学習が，『暗記』から『理解』になった。」，「E.H.カーの言う「歴史との対話」ではないかと思います。」（私はE.H.カーの「歴史とは現在と過去との対話」を最初

の授業「なぜ歴史を学ぶのか？」で必ず紹介している），というようなものである。また，とくに用語の単純暗記がにがてな生徒は，この学習形式を楽しんでいるようである。

「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」（小川幸司「歴史学研究859号」2009年）という言葉に私は衝撃を受けた。まさしく私そのものだったからである。自らの授業方法を考え直した大きなきっかけだった。

そんな「苦役」を終わらせる世界史教育は果たして可能なか。現場は果てしなく忙しく，教員が教材研究の時間を確保することが困難な時代である。また，この東南アジアの前近代史を扱うことができる時間はせいぜい1，2時間だろう。しかし「近くて遠いアジア」とならないように，未来を形成してゆく生徒たちにはじっくりと考えて学んでほしい分野である。

日本の世界史教育が参考にすべき点は海外にも多くあるようだ。イギリスのGCSE教科書，独仏共通歴史教科書，バルカン近現代史の共通教材，日中韓3国共通歴史教材，または全米世界史基準，AP(Advanced Placement)テスト，国際バカロレア(IB；International Baccalaureate)やドイツのアビトゥーア(Abitur)のような試験などから日本の世界史教育が学ぶべき点は多い。いまこそ史料（資料）を提示して問い，生徒とともに考え，悩み，可能性を語ることが許される世界史教育の環境を整えることが切に求められている。

【参考文献】

- ・アンソニー・リード著，平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジアI』（法政大学出版会，1997年）
 - ・石澤良昭『東南アジア多文明世界の発見』（講談社，2009年）
 - ・羽田正編，小島毅監修『東アジア海域に漕ぎだす1海から見た歴史』（東京大学出版会，2013年）
 - ・弘末雅士『東南アジアの港市世界』（岩波書店，2004年）
 - ・福島県高等学校地歴・公民科研究会 世界史資料集編集委員会編『新世界史資料集』（清水書院，1994年）
 - ・桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』（山川出版社，1996年）
 - ・桃木至朗編『海域アジア史研究入門』（岩波書店，2008年）
 - ・歴史学研究会編『世界史史料3，4』（岩波書店，2009，2010年）
- （このようなQ&A学習に興味がおありの方は，プリントをお送りいたしますのでご連絡いただければ幸いです。kawasima@js.doshisha.ac.jp）